

ふるさと奥尻通信

平成26年10月31日
奥尻町教育委員会発行
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭語

桃栗三年柿八年と言いますが、本当にそうなのか？確かめた人はいるのだろうか。ふと疑問です。人間の場合、いきなり才能が開花することがありますが、それは地道な日々あってこそ。

特集 庚申の杉

奥尻港に面した観音山の登り口に、一本の大きな杉の木があります。この杉の木は「庚申の杉」(こうしんのすぎ)と呼ばれて地元で親しまれています。推定樹齢約250年とされ、直径約100cm、樹高約30mを測り、昭和43年(1968)には北海道百年記念事業の一つとして、北海道の名木・美林149点の一つに選定されました。

この木は現在、澳津神社の所有となっているのですが、そもそもは、この木の下に明治の初めに本陣(福岡藩統治時代に行政の中心となった場所。行政機関発祥の地とも言える。後に道立診療所、加藤病院となる)が置かれ、その裏手には昭和の初期頃まで澳津神社の社殿が建っていました。

言い伝えとして、明治期から昭和期にかけて、奥尻港へ渡ってくる船の船着きの目印となり、夜には枝にカンテラを下げて火を灯し、行き交う船を誘導したとされます。

また、根元には「横田秀清碑」と彫られた、明治38年建立の石碑がありますが、由緒は解っておりません。どなたかご存じの方教えて下さい。



横田秀清碑

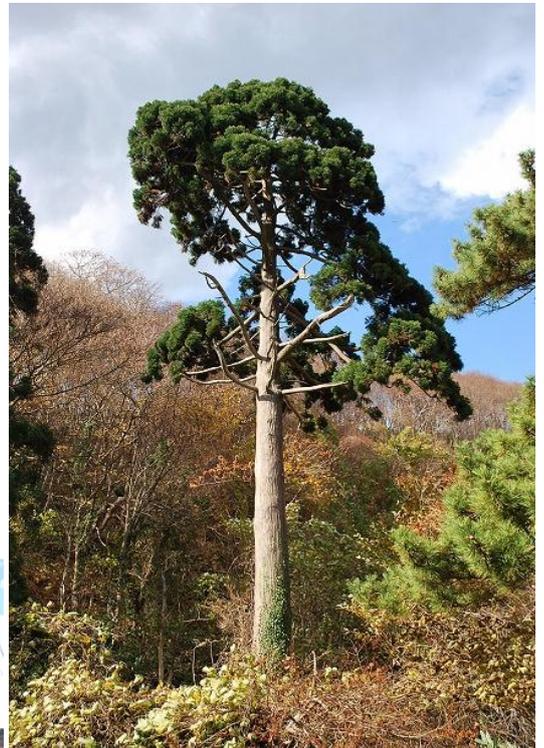


杉右手の建物周辺が本陣跡

さて、この木が「庚申の杉」と呼ばれるのはなぜなのでしょう。はっきりした由来は伝わっていないのですが、名前となっている「庚申」が手がかりになりそうです。それぞれ「庚」(こう、かのえ)、「申」(しん、さる)と読みますが、これらは干支(かんし・えと)の組み合わせです。干支は干が10、支が12あることから、十干十二支(じっかんじゅうにし)と呼ばれ、全部で60の組み合わせがあります。これは数字の10と12の最小公倍数が60だからです。

問題の「庚申」(こうしん、かのえさる)は、57番目に当たり、西暦でいうと、近世では1620年、1680年、1740年、1800年、1860年、近現代では1920年、1980年、将来では2040年です。仮にこの木が庚申の年に植えられたとして、推定樹齢約250年ですから、ちょうどよい位に当てはまる年は1740年(元文5年)ということになります。ひょっとすれば、この年に植えられたので「庚申の杉」と呼ぶようになったのかもしれない。詳しい由来をご存じの方は、こちら是非とも教えて下さい。

江戸時代以来、長きにわたって奥尻の歴史を見守ってきた杉の木ですが、昭和38年5月の奥尻大火の際には、寸前で延焼が収まり、類焼を免れるなど、幸運もありました。島の天然ブナの巨木が島の自然史の象徴であるとするれば、庚申の杉は島の地域史の象徴と言えましょう。いわば奥尻の御神木とも言える巨木をこれからも大切にしていきたいものです。今後は奥尻島に残された遺産として注目していきたいです。



現在の庚申の杉 平成26年



大正時代の庚申の杉
塚田写真館発行 絵葉書



奥尻大火で焼け残った庚申の杉 昭和38年5月末頃

